

ミルク、ある？ ガス・ヴァン・サント、歴史と邂逅する

B・ルビー・リッチ
溝口 彰子 訳

二〇〇八年十一月

二〇〇八年十一月、サンフランシスコのカストロと八丁目の角、無償提供された店頭に「期間限定ミュージアム」が登場した。同じブロックの歴史ある映画館カストロ・シアターでの映画『ミルク（MILK）』のプレミア上映とあわせたこのギャラリー展示は「情熱的な闘争」と名付けられ、サンフランシスコ市のゲイ、レズビアン、バイセクシュアル、トランスジェンダーのコミュニティの歴史をたどるものであった。壁にぎっしりと展示された記録写真とテキストは、長年にわたる抑圧と闘争と、そして勝利した際の数々のパティイの様子を証言するものだが、もっとも重要な作品は、部屋の奥に設置された何の変哲もないケースだった。通常は気温と湿度が管理された環境で、神聖なものとして厳重に管理されている宝物がその中に展示されていたからだ——ハーヴェイ・ミルクが暗殺されたときに実際に着ていたストライプ柄のスーツが^{（訳注）}。織り目の細かい生地に残る血痕と、銃痕で縫い目が裂けているのもそのままに、その年季の入ったスーツはガラスケースのなかに横たえられている。巡礼を待つ殉教者の聖遺物である。大勢の観光客、地元民、映画観客が詰めかけ、静かな店頭が現代の聖遺

物箱へと変貌した。彼らのなかには、記憶に突き動かされている者も、好奇心からきた者も混じっていただろうが。

「カストロ通りの市長」として知られたサンフランシスコの市政執行委員は、死後三〇年を迎えて市民たちから歴史的偉人として事実上認められたわけだ。それと同時に映画会社フォーカス・フィーチャーズと伝説制作装置によって、シヨン・ペンによる奇妙な身体化を通して、ハーヴェイ・ミルクの偉人化は行われていた。すぐ近くの映画館で、そして全米で、またさらに全世界で。

一九八二年春

すべての始まりとなったドキュメンタリー映画

当時私はニューヨーク市で公務員の仕事を始めて二年目。仕事内容は、ニューヨーク州芸術協議会（NYSCA）の映画部門のディレクターとして、公共に仕え、税金を分配することだった。同時にライターとして『ヴィレッジ・ヴォイス』に映画記事を寄稿していた。私にとっ

て昼の仕事（平日の日中だけでなく、夜も週末も働いていることもあった）が意義あるものであったのは、自分が信じるプロジェクトに資金を供給できるからだった。権力のバランスをリセットし、それまで

主流の文化圏の数々において周縁化されていたゲイやレズビアンやフェミニストやラテン系男女やアフリカ系アメリカ人やアジア系アメリカ人の重要な声が聞こえるようになることが重要だと、私は考えていた。当時は「インディペンデント」長編映画ムーヴメントがスタートした時代でもあった。それは、NYSCAが映画製作プロジェクトに資金を提供する業務にとつての追い風であり、私は嬉しく思っていた。

そのため、私は少なからぬ興味を持ってドキュメンタリー映画制作者リチャード・シュミークンとの打ち合わせに臨んだ。リチャードはプロデュースを手がける重要なプロジェクトについて概要を説明したいとのことだった。その物語も制作もサンフランシスコのものであり、NYSCAはニューヨーク州のプロジェクトのみに資金を提供することが法律で定められていたのは確かだ。だが、プロデューサーであるリチャードがニューヨーク市在住で、そこでも仕事をする（したがって、NYSCAの助成金を州内で使う）ので、なんとかならないだろうか？ リチャードによれば、その映画はゲイの「公民権」運動を初めて提示する歴史映画になるという。

そのドキュメンタリーが中心に扱う人物は、東海岸でも、もつとよく知られるべき人だった。彼の名前はハーヴェイ・ミルク。西海岸では有名だ。彼は、カリフォルニア州のプロボジション（提案）6号、もしくはブリッグス議案という、カリフォルニアじゅうの学校からゲイやレズビアンの教師を駆逐しようとする法案を阻止する運動の先鋒をつとめ、また、あらゆるゲイとレズビアンにとつての疫病神アニタ・ブライアントがけしかけたホモフォビックな（同性愛嫌悪的な）勢力と最前線で戦ったことでも知られている。正確にはひとりめの、ではないが、最も有名なゲイの公職者だ。^③ 先進的な思想を持つサンフランシスコ市長ジョージ・モスコニーとともにハーヴェイが暗殺されたのは一九七八年、選挙に当選してまださほど月日はたっていない。二人を殺害したダン・ホワイトは頭のおかしな同性愛嫌悪者（ホモフォブ）であった。彼は、市長とハーヴェイとともに市政執行委員会に席

があり、その支持層は白人労働階級のなかでも特にホモフォビックな警察官と消防士だった。^④

ダン・ホワイトのことは我々全員が知っていた。トゥインキーという駄菓子を食べ過ぎたためだという「トゥインキー弁護」を展開し、二人を殺害したにもかかわらず、わずか五年の刑期しか課せられなかった殺人犯として。トゥインキーという言葉がゲイに対する侮蔑語でもあるにもかかわらず、ホワイトの弁護団は、ホワイトが砂糖を過剰摂取したために正常な判断力を失っており、責任を問われるべきではないと陪審員たちを説得することに成功したのだ。「トゥインキーのせいではなかった【ホモ野郎どものせいではなかった、という意味ともなる】^⑤」というセリフは伝説となった。当時、ホワイトはまだその忌まわしくも短い刑期で服役中であり、プロデューサーのシュミークンと監督のロブ・エプスタインは、ホワイトが出てくる前に映画を公開しようとしていた。

シュミークンによれば、ニューヨーク市で開催したばかりの資金集めイベントで、予告編映像に観客は熱狂し、ニューヨークのゲイ・コミュニティが支援を確約したという。シュミークン自身、その日その場でプロデューサーとして正式に契約をした。シュミークンがNYSCAに提出したサンブル映像は撮影、編集ともに雄弁な素晴らしい出来だった。^⑥ そしてもちろん、NYSCAの映画製作部門の委員たちは、このドキュメンタリーの歴史的意義と芸術的クオリティを認め、次の期で、シュミークンとエプスタインに作品を完成させるための製作費を提供した。このドキュメンタリー映画は一九八四年に『ハーヴェイ・ミルクの時代（邦題…ハーヴェイ・ミルク）』としてリリースされ、批評家からも一般の観客からも絶賛された。

エプスタインの記録撮影は、ハーヴェイ・ミルクとサリー・ギアハートによるキャンペーンから始まっていた。ギアハートはレズビアンの教育者であり改革運動家であり、ハーヴェイのテレビ出演や公開討論に同行し、経験と知識と卓越したユーモアのセンスをもって保守派を

論破していた人物だ。二人による疲れを知らない訴求活動と草の根活動が流れを変えた。カリフォルニア州の保守勢力とモラルマジョリティ【保守的な政治宗教団体名】支持者たちの期待に反して、有権者たちは憎悪と狂騒の作戦を拒否し、法案を阻止したのだ。ミルクにとつては本当の意味でキャリアが始動した瞬間であった。さぞやうれしかっただろう。自分が間もなくホモフォビアの怒りにターゲットとされることなど知る由もなかったのだから。

ミルクの暗殺後の生々しい衝撃の時期が過ぎると、エプスタインは、ミルクとともに働いた人々のインタビューを始めた。かれらは、ハーヴェイを知り、愛し、選挙戦を手伝い、同盟を組み、ハーヴェイとともに本当の意味で民主的なサンフランシスコ市を実現することを構想した人々だ。撮影監督や編集担当など、ドキュメンタリー『ハーヴェイ・ミルク』にはサンフランシスコのインディペンデントなドキュメンタリー映画コミュニティのオールスター・キャストが集った。全員がゲイやレズビアンだ。そして、そのドキュメンタリーは怒り、哀愁、ショック、記憶を混ぜ合わせ、それを誇りと喪失についての情熱的で感情的な記録として示す、驚くべき作品であった。これまでにアメリカで作られたドキュメンタリー映画として、間違いなく最高峰の出来だった。

そして、『ハーヴェイ・ミルク』は一九八四年のアカデミー最優秀ドキュメンタリー作品賞を受賞。ロブとリチャードは輝くようなタキシード姿で舞台上立ち、歴代のオスカー授賞式で初めての「カミングアウトした」受賞者としてのコメントをした。二人はハーヴェイと彼らの複数のコミュニティに言及し、ロブにいたっては「ライフ・パートナー」の支えに対しての感謝も述べた。とあるプロガーは、オスカー授賞式におけるカミングアウトの瞬間の重要性を強調し、「あの夜、歴史が作られた」と綴った。ドキュメンタリー『ハーヴェイ・ミルク』はまず一六ミリフィルム版が劇場公開された。その後は、公共チャンネルPBSでのテレビ放映、ビデオ版、さらにはDVD版、Netflix

ダウンロード版と続いた。名作上映会や学校の教室での上映も数多く、作品が広く知られるようになったが、二〇〇八年、ガス・ヴァン・サントによる劇映画『ミルク』の公開によって、ドキュメンタリー版が知名度を得るプロセスがもう一回、始まった。ドキュメンタリー映画『ハーヴェイ・ミルク』は、製作者たちが望んだとおり古典的名作の仲間入りをした。それはまた、文化遺産とも呼べる地位を得ることになった。もっとも、この作品が持つ芸術作品としてのパワーと感情面でのパワーからすれば、当然のことだったが⁶。そして、それは、ガス・ヴァン・サントの見解によれば、劇映画『ミルク』の基ともなった。

一九八四—一九九三 監督を探し求める映画

ガス・ヴァン・サントはニュー・クイア・シネマ(NQC)運動が登場する五年前に映画を作り始めた⁵。ある意味において彼はNQCの中心的な先祖であり、別の意味においてはパーティに再び参加したヤツでもある。ハーヴェイ・ミルクがまだ生きていて活躍していた一九七〇年代は、ロサンゼルス映画業界に食い込むのに忙しすぎて、サンフランシスコに行ってデイスコで遊んだりハーヴェイに会いにくいような暇がなかった、とヴァン・サントは語る。とはいえ、一九八六年の春、デビュー長編映画『マラノーチェ』をゲイ・アンド・レズビアン・フィルム・フェスティヴァルの一環としてカストロ・シアターで上映したとき、彼はその失われた時間の埋め合わせをしたといえる。報いられない欲望についての夢のような感觸の覗き見的観察である『マラノーチェ』は今日見ても鮮烈だ。様式においてもテーマにおいても類似のものが思い浮かばない独創性があり、メランコリックで優しくてセクシーな本作は、ヴァン・サントの地元であるポートルランドでホームレス寸前の暮らしをおくる店員・ウォルトの生活と、ジョニーという不法滞在のメキシコ人の若者に対するウォルトの欲望を詳しく描き出す。画面の粗いモノクロで撮影された本作には原作がある。ネ

イティヴ・アメリカンの息子であるウォルト・カーティスによる小説だ。情熱と気持ちのこもった、何かを発見させられるような映画であり、NQCが認知され、映画製作者志望者が増殖したのちによく見かけるようになったニッチ市場を狙うコメディ映画とは一線を画していた。それどころか、『マラノーチエ』は、妥協なきアーティストによる映画だ。公開されるとすぐに、私を含めた数多くの批評家は、その親密さと大胆さに驚かされた。映画ファンたちは新しい才能の登場を宣言した。ヴァン・サントは最初はゲイ映画祭をベースにしていたが、彼がもっと先まで行ってメジャーになるだろうことは明らかだった。ヴァン・サントが珍しかったのは、そうだった後でもゲイ映画祭に積極的に戻ってきたことだ。

一九八六年のLGBT映画祭サーキットは今日のそれとは多くの点で異なっていた。当時はゲイやレズビアンは生活のあらゆる側面で論争をしたものだが、それは映画祭のなかでも同様だった。レズビアンもの映画のプログラムよりもゲイ男性ものプログラムのほうが多いのでは？ チケット価格を高くしすぎるとコミュニティのメンバーのなかでもお金を持っていない人を排除するのでは？ オーガナイザーたちは企業スポンサーにおもねりつつあるのでは？ 人種差別は？ など。映画祭もまた、どんなものでもそうであるように社会の縮図だったし、いつもそうであったように、常に何かしらの戦いが勃発していた。

『Outlook』誌は、ゲイとレズビアンをめぐる複数の理論、ニュース、歴史的調査に特化した初めての現代的ジャーナルとして重要なものだったが、発行団体はサンフランシスコにあった。全面的にボランティア運営のサンフランシスコ・ゲイ・アンド・レズビアン・ヒストリー・プロジェクトはコミュニティの物語や歴史や画像を積極的に収集しており、それらを、地元だけでなくアメリカ各地でシェアする活動もちょろど展開していた。『B.A.R.』といったローカル・ペーパーが政治からバーから「ゲイ向けの」ハッテン浴場」まであらゆるものをカバーする一方で、『Outlook』は、アメリカ全体の文学や研究のシーンに

サンフランシスコの視点を持ち込んでいた。当時のサンフランシスコはLGBTの動きの中心であり、映画祭もそうであった。

ヴァン・サントは、数ヶ月前にベルリン国際映画祭での『マラノーチエ』の上映時に出会ったサンフランシスコのレズビアン・アンド・ゲイ映画祭のディレクターであるマイケル・ランピンの家の居間に泊まっていた。ヴァン・サントは当時を回想し、「あれがサンフランシスコへの入り口だった。あらゆる人に会った」という^⑦。なかでも、カストロ・シアターの観客を別にすれば、このサンフランシスコ滞在中で彼を最も喜ばせたのは映画監督ロブ・エプスタインと出会ったことだ。カストロ地区に深いルーツをもつエプスタインは、当時、アカデミー賞をとったばかりで、ガス・ヴァン・サントにとっての、ゲイ・アンド・レズビアン映画製作世界への指南役となったのだ。なにしろ、一九七〇年代、血の気多い若者だったエプスタインは「初めてのゲイについてのドキュメンタリー映画」である『Word Is Out (言葉が発せられた)』(一九七七)を制作した集団の最年少メンバーだったのだ。エプスタインはみなが見習う黄金の基準だった。二人の出会いが長く続く友情の始まりだったが、ヴァン・サントにとっては、ハーヴェイ・ミルクの生涯についての劇映画をいつか作るという長い白昼夢の始まりとしても重要であった。

一九九一年、オリヴァー・ストーンがハーヴェイ・ミルクの物語を映画化することになったという情報が流れ始めた。ストーンの役割がプロデューサーなのかそれ以上なのかは明らかにはならなかったが、怒りの声が即座にわきあがった。図々しいにもほどがある！ その直前にストーンが手がけた一連の作品は、『ドアーズ』(一九九一)、『七月四日に生まれて』(一九八九)、『ウォール街』(一九八七)、『プラトーン』(一九八六)などであり、とてもではないが、ゲイ・フレンドリーな映画監督としての信用に磨きをかけるものではなかった。ゲイ・メディアはこぞって厳しい批判記事を掲載し、映画会社ワーナー・ブروسを糾弾した。ミルクの生涯は今や神聖な物語となっているのに、ラ

ンディ・シルツの著作『カストロ・ストリートの市長』の権利を購入して、オリヴァー・ストーンに映画化をさせようとするとはけしからん、と。するとまた別の噂がまわってきた。ストーンはプロデューサーをつとめるだけで、監督はガス・ヴァン・サント、ハーヴェイ役はロビン・ウィリアムズだというのだ。そうなると話はずっと変わってくる。夢のような良い話だ。とはいえ、映画版『カストロ・ストリートの市長』はまだ、実現はしなかった。

コラボレーションがうまくいかなかったのだ。一九九三年初頭、ヴァン・サントがこの企画から抜けた。理由は「脚本をめぐる意見の衝突」とされた。代わりにヴァン・サントは別の本で別の時代の映画『カウガール・ブルース』（一九九三）を撮ったが、残念なことにはこの作品は、私個人は今日にいたるまで強く支持しているのだが、ヴァン・サント監督作としては唯一、評価も興行成績も不発だった。『ドラッグストア・カウボーイ』（一九八九）、『誘う女』（一九九五）、『マイ・プライベート・アイダホ』（一九九二）、『小説家を見つけたら』（二〇〇〇）と、主流映画シーンで活躍したヴァン・サントは、二十一世紀になると大衆市場向けの映画に背を向け、ポートランドでのアウトサイダー精神に回帰しはじめた。その後の、『ジェリー』（二〇〇二）、『ラストデイズ』（二〇〇五）、『エレファント』（二〇〇三）、『パラノイドパーク』（二〇〇七）など一連のクセのある低予算作品群は彼の独自性を再提示し、初期の、アートスクール出らしいイマジネーションの数々へと彼を引き戻した。

その間も、ヴァン・サントはミルク映画について考えるのをやめたわけではなかった。まず、シルツが亡くなった後、彼は劇映画権を取り戻すための別のやり方を試みはじめた。「二人の共同執筆者と別の脚本を作った。『マルコヴィッチの穴』のチャリー・カウフマン的な、かなりユニークな作風で、すごく気に入っていたんだが、残念ながら一九九〇年代前半だったので、チャリー・カウフマンがまだ登場していなかった」少なくとも、映画に関してはいえば、ヴァン・サン

トはため息をつきながら、いかにミルク映画を撮ろうとしたかについて詳しい話を続けた。一度などはロシアの映画監督アレクサンドル・スクロフの戦略にインスパイアされ、ただし舞台はカストロで、アーティストックかつ低予算の寓話としてミルクの物語を撮ろうという狂った計画をたてたことも告白してくれた。十年以上にわたって様々なアイデアが生まれたものの、どれも実現にはいたらなかった。だが、ヴァン・サントは夢見ることも企てることもやめなかった。

二〇〇七—二〇〇八 映画『ミルク』のメイキング

運命であるかのようなのだが、まさにヴァン・サントが情熱の対象である低予算作品群に機嫌よく取り組みを再開したその時に、ハーヴェイ・ミルク作品を（『ユー・ジュアル・サスベクツ』（一九九五）や『X—メン』（二〇〇〇）の）ブライアン・シンガーがワーナー・インディペンデントで監督するというアナウンスが業界から出された。これは、もともとヴァン・サントが予定していたプロジェクトだ。脚本家はシンガーと長年、組んできたクリス・マカリーで、今回もまた、シルツの本に基づいた脚本になるとのことだった。ただし簡潔になったこともあった。今回は映画のタイトルが『カストロ・ストリート』と短縮されたのだ^⑧。しかし、シルツ本を原作とする劇映画の呪いはまだ終わっていないかった。ハリウッドにおける典型的なくじ引きシステムにより、ひとつの企画しか勝利のチケットを得ることはできないのだ。そして、シンガーとマカリー組は敗北した。ブラックのせいだ。

若き脚本家ダスティン・ランズ・ブラック（【HBOドラマ】『ビッグ・ラブ』が登場したのはその時だった。ブラックはハーヴェイ・ミルクの物語を発掘するために自らサンフランシスコを訪れており、かつてミルクの弟子だったクリーヴ・ジョーンズと会って話をきいていた。ジョーンズは、その十五年前にヴァン・サントに話をしたのと同様に、今度はブラックに話したわけだ。ブラックによる脚本が、ヴァ

ン・サントの手によってハーヴェイをスクリーンで描くために必要なる突破口になるかもしれないと考えたジョーンズは、それを素早くガスに渡した。ミルク時代の民衆煽動者ジョーンズ（映画『ミルク』ではエミール・ハーシュが演じている）がふたつの世代を結びつけたのだ——アート志向の若者が偉大な映画監督になったヴァン・サントと、テレビの技巧を知った駆け出しのゲイでモルモン教徒の若者ブラックとを。ヴァン・サントとジョーンズと同様に、ブラックもまた、ハーヴェイ・ミルクの生涯を映画のスクリーンで描きたいと夢見ていたのだ。

脚本を読んだヴァン・サントの反応は、ひとことでいえば、よしやろう、だった。ヴァン・サントが参加、ブラックの脚本があるということで、フォーカス・フィーチャーズが製作に乗り出した。なにしろ、フォーカスのトップであるジェイムズ・シャムスは、(クリスティン・ヴァチョンとともに)かつてニュー・クイア・シネマの全盛期に活躍したプロデューサーのなかでも古株のひとりだったのだ。直近では、シャムスとフォーカスは、シャムスが長年組んできた監督アン・リーの『ブロークバック・マウンテン』を製作したところだった。カストロ地域での撮影を条件にショーン・ペンがハーヴェイを演じる契約をしたところで、賽は投げられた。できうる限り史実に忠実な歴史映画プロジェクトの始動である。ハーヴェイと彼のコミュニティのためにそれはそれしかありえない。そこで、ハーヴェイと親しかった人々へのインタビューと、ゲイ・アンド・レズビアン・ヒストリー・アーカイブでの調査と、カストロ地区の建物で、ハーヴェイが生息した一九七〇年代の風景に変貌させることが可能な物件の品定めが再び始まった。ヴァン・サントの旅一座の到着が近づくにつれ、サンフランシスコはその話題でもちきりになった。映画製作がカナダや他の州でなされることが多い時代にもかかわらず、地域のビジネスのため、製作費が地元経済に注入されることが確約された。地元住民にとっては、ショーン・ペン、ジェイムズ・フランコ、デイエゴ・ルナらセレブリティを

見物できるという、カリフォルニア州のより南、ハリウッドでよくあることを意味した。

サンフランシスコのLGBTコミュニティにとっては、『ミルク』のキャストとスタッフとカメラの到着が意味するものももっと大きかった。これは前代未聞の経験だった。LGBT殉教者の伝説的過去と彼が愛した市が、ついに大スクリーン上の英雄譚と悲劇という次元に引き上げられることになったのだ。ミルク本人が住み、愛し、そして変革を実現するために働いたまさにその通りや店頭で撮影が行われるのだ。そんなことを経験した人はどこにもいない。地元のゲイ・メディアはゴシップや目撃談やエキストラ参加した人々の自分がたりなどを次々と掲載し、あたかもサンフランシスコが、アメリカという国の真ん中で、スターを囲んで狂乱している小さな町に変貌したかのようだった。

我々のように映画のことを大切に思い、映画のことを考え、映画について執筆し、映画祭を廻り、学生に映画を教える人たちは、映画というものが人々の自覚を形成する純然たる力のことを忘れがちだ。完成した映画がスクリーン上で持つ力だけではなく、『ミルク』のような稀なケースでは、そのメイキングもだ。二月の晴れた平日、カストロ通りをヴァン・サントが撮影している十九丁目まで歩いていった私は驚愕した。映画の現場に、ではなく、シミュレーション【オリジナルとの優劣が解消したコピー】に足を踏み入れるという経験に。

一九七〇年代版のサンフランシスコに私は魅了されたのだ。不意打ちだった。不動産屋には一戸建て家屋が四万ドル(約四百万円)で売りに出していた。ガソリンの値段は笑えるほど安い。再現されたアリエリアス・レコード店のウィンドウはLPレコード版とアシッド・ロックのポスターで埋め尽くされていた。カストロ・シアターの入口のひさしとネオンは当時のままのきらびやかな色合いに修復されており、『ポセイドンアドベンチャー』(一九七二)を宣伝していた。語り草となったハーヴェイ・ミルクのカストロのカメラ店もそこに再現さ

れていた。メアリー・ポピンズかハリー・ポッターか、なにかそういうタイギリス人が好む発明から飛び出してきた幻影のように、区画のまんなかに。そして、ミルクがミレーティングをしていたまさにその事務所も。これらはジュニ・オルソンによる感情をゆさぶる儀式『575カストロ通り』（二〇〇八）で誰もが見る事ができる^⑤。

奇妙なことに、手の込んだ再現がなされた店頭や外壁のなかで、私の目をひいたのは、壁に貼られたフライヤーのローテクな画像だった。コンピュータ以前の硬くて素朴なグラフィック、手書きの見出しやイラストレーションと混ざったタイプライターのフォント、謄写版やオフセットで色紙に印刷されたそれらのフライヤーたち。今度のゲイ・リベレーション・ミレーティングを、次のデモを、次の族の集まりを、息を切らせるかのような切迫感をもって、詳しくアナウンスするチラシがぎっしりとあったのだ。

タイプライターのフォントがタイム・マシーンになった？ そうなのだ。なぜか。わたしはセットのなかを歩きながら、自分自身の過去を再び経験しているような気分になり、にやにやしてしまっただ。思い出していたのは、延々と続いたミレーティングの数々、若き日々の情熱、そして政治行動だ——私の場合、シカゴとニューヨークだったが。それから私は、時間の裂け目を跳ぶことによって、当時の純粹さと希望を取り戻したいという衝動から、くる日もくる日もセットのある通りに戻った。そこにあるすべてのフライヤーはかつての時代の証明だった。数々の出来事や、法廷闘争や、死や、道徳を騙った強力な撲滅運動が我々のつかの間の祝賀を襲撃する前の。私は、一九八〇年代になって、一九六〇年代と一九七〇年代のことを語る機会があったのだが、その時に誰かにこう言われた。「あなたは人生を、あたかもお祭りのように扱ったのですね」と。その通り。私たちは、全員が、人生をがぶ飲みした。勢いよく。世界がより良いものに変化するのだと、古い規範やタブーや偏見は正しき革命のパワーでひっくり返されるのだと、みな情熱をもって信じていた時代だった。めっちゃくちやセクシーな

時代でもあったことを思い出さずにはいられなかった。誰よりもそれを知っていたのは、ハーヴェイだ^⑥。

当時を再現するために必須の巨大な群衆シークは、社会史上の愉快な授業をとまなうことになった。行進やデモや悪名高き「ホワイト・ナイト」暴動のシーンにエキストラが必要だとウェブで募集がかけられた。参加したいボランティアたちは、ファッション上の誤ちを回避するために書き連ねられた条件リストに同意することが求められた。三十年前のカストロ地域の暮らしを特徴づけるものとそうでないものを、新しい世代が気づくように、ウェブサイトとフライヤーには以下が記載された。

全体的な雰囲気は、サンフランシスコのとある晴れの日です。あらゆるタイプの服装を奨励します。というのも、一九七八年のゲイ・フリーダム・デイは多様性のあるコミュニティであるものではなかったからです。七〇年代らしいドラッグ（クイーン）とレザーは大丈夫です。

男性の上半身裸は奨励します。というのも、七〇年代のカストロ地域では晴れの日には上半身裸になることは流行っていたからです。下半身は通常、リーバイスのタイトなジーンズとスニーカーでした。タトゥーについては、見えても少しだけであることが重要です。というのも、一九七八年当時は、たくさんタトゥーをいれるのは、今日ほどはよくあることではなかったからです。

靴・コンバースのようなキャンバス布のスニーカー、フライのようなレザー・ブーツ、またはクロッグス。キャンバス布やレザーなど、ベーシックな素材の、シンブルで、ごつい靴。短パンの場合は、スニーカーをはくこと。運動用ソックスははいてもはかなくても可。

禁止アイテムも示唆に富んでいる。

明らかにレインボーをテーマにした服。というのも一九七八年の時点ではレインボー・フラッグはまだゲイ・コミュニティのシンボルではなかったのだ。

「サーキット・パーティ」服や「レイヴ服」など、クラブ・イベント系の服装。

現代的に見えてしまうため。

明らかに現代的な仕上がりでのデザイナー・ジーンズ。

アーバークロンビー、ナイキ、ギャップなどのブランド名が見える服。

言葉やロゴが見える服。

さらに、参加者たちはいかなる状況でもペットボトル入りの水を持たないように注意された。一九七〇年代の人々はペットボトルの水を飲まなかったのだ。現代のエキストラたちは、当時の人々が、驚いたことに水道水を飲んでいたことを教えられなければならなかった。そのほかの違いは服装規定（ドレス・コード）というよりは参加者間のコミュニケーションをとおして、間接的に浮上した。「ホワイト・ナイト」の行進と暴動の再現に参加した友人によれば、実際の時にも参加したのだと話す高齢の男性に会ったという。「その時もちょうどこんな感じでした？」と質問した私のレズビアン友達に対して、その男性は注意深く言葉を選びながらこう答えたそうだ。「そうだね、当時はこんなに大勢の女性はいなかったね」と。

なんて配慮に満ちた発言。映画『ミルク』の明らかなメッセージのひとつであり、ドキュメンタリー映画『ハーヴェイ・ミルク』においても、多少は共通していることは、一九七〇年代のLGBTシーンがいかに【男性中心の】ホモソーシャルなものであったかだ。意図されたメッセージではないかもしれないが、カストロ口地区での出来事に女

性が不在であったことは、これらの映画では現実より控えめに描写されている。複数のLGBTコミュニティーズの内部においても、またコミュニティ間においても、より緊密な関係性がある現代においては、当時のゲイ・リベレーション運動ではレズビアンは興を削ぐ存在だと考えられていたことを忘れがちだ。レズビアン・コミュニティの多勢は、公共の場でのセックスに眉をひそめ、バスハウス【「ハッテン」風呂】文化を持たず、政治的基準と倫理を執拗に強調し、一般的にアンチ・セクシズム（性差別主義反対）でアンチ・レイシズム（人種差別反対）で、他者を性的対象として搾取する姿勢に反対であったため、ゲイ男性の快楽と解放の生活からは疎遠だった。逆もしかり。ゲイ男性たちはジェントリフィケーション【彼らの移人によって結果的にその地域の不動産の価値を引き上げ、より貧しい人々を追いつつること】や派手な消費や性的冒険を非難されることに憤っていた。レズビアンとゲイが全員そうであったというわけではなく、S&Mやレザーや緊縛プレイといった「異常」行動のためにレズビアン・コミュニティのなかで周縁化されていると感じていたレズビアンたちは、レズビアン・フェミニストによる性的実践や社会的実践の監視に反対し、ゲイ男性たちと共通の主張をした。同様に、社会や政治の論点に関して、レズビアン・フェミニストたちと共通の主張をした政治的自覚をもったゲイ男性も存在した。それでも、映画『ミルク』で、アン・クローネンバーグを演じる女優（アリソン・ピル）は、ハーヴェイに誘われて選挙事務所にやってきた時に、男性たちに向かって挑戦的にこう言うのだ。「あなたたち男は女が嫌いだって友達が言ってたけど、そうなの？」と。もちろんその通りだ。このシーンは、そうではないとほめかすように演出されているが。

サンフランシスコでの撮影が続くにつれて、過去からの霊がそこらじゅうで動き、渦巻き続けた。なんといっても、サンフランシスコは亡霊には事欠かない。私は、撮影中に何か変わったことや普通ではないことが起きなかったかヴァン・サントにきいてみた。ヴァン・サン

トは少し間をあけてからこう答えた。実は、あったよ。二回。一度目は、ミルクを暗殺し、刑期を終えて間もなく自殺したダン・ホワイトの息子のチャールズ・ホワイトがセットを訪問した時だ。とっくに大人になっていたチャールズは、撮影現場に立ち寄りたい、とヴァン・サントに連絡してきたという。彼がやってきた時に撮影していたのは、ちょうど彼自身が幼い時に洗礼を受けるシーンだったのだ。超自然的タイミングである。カメラがまわると、神父がおこそかに告げた。「チャールズ、君に洗礼をさずける」と。そしてそのテイクは終了。ヴァン・サントが見回した時にはチャールズ・ホワイトはすでにセットを立ち去ったあとだった。そして、「戻ってくることはなかった」。

それと、カメラ店で、ハーヴェイが『サンフランシスコ・クロニクル』新聞が自身の選挙戦への支持表明をしてくれたことを知ったシーンを撮影していた夜のことだ。複雑なショットだったため、ヴァン・サントは、完全に集中していた。撮影後、ヴァン・サントはクルーに取り囲まれ、もうひとりの男性は誰だったのか説明してほしい、と懇願された。どの男性だった？ クルーたちは、見たことのない男が部屋にいて、撮影が終わったと思ったら消えていた、間違いない、と言った。どこから入ってどこから出て行ったのかはわからなかったが、こういう人物だった、とクルーたちは詳しく語った。「それがハーヴェイの特徴にぴったりで」とヴァン・サント。実際、その訪問者はハーヴェイの椅子に座っていたのだという。「カメラはその方向を向いていなかったのだけれど」

映画『ミルク』が過去の亡霊をある種の迫真性をもってとらえたということに疑いがあったとしても、その疑いは、二〇〇八年十月二六日、ジョージ・ルーカスのプライベート試写室・プレジディオで消え去った。そこでは、ヴァン・サントが、試写に訪れた極めて重要な人々を迎え入れていた。この映画は、彼ら彼女らの人生や経歴をもとにして作られたのだ。照明が暗くなると、アン・クローネンバーグが昔の仲間、ダニー・ニコレッタ、マイケル・ウォン、トム・アミアノたち

にティッシュペーパーをまわしていた。彼らはみなミルクの友達でありお互いも友達であり、ヴァン・サントとブラックに対して、助言や調査や、カメオ出演という形で協力した人たちだった。上映が終わって照明がついた時には、すすり泣きの音がたくさん聞こえたが、それだけではなかった。映画『ミルク』でも見られるように、彼らは、共有した過去に対して、ユーモアを忘れなかった。「スコットがすでに亡くなってしまっているのが本当に残念」と、ミルクの恋人であったスコット・スミスについてからかうような発言をした人もいた。「ジェイムズ・フランコが自分の役を演じたただなんて、スコットが知ったらどれほど喜ぶか！ ラッキーなヤツ」過去の関係者たちは全員、ヴァン・サントに対して、良い作品だ、ハーヴェイに対しても筋を通している、と賞賛した。

シミュラークラムとしての映画

二日後の二〇〇八年十月二八日の初日パーティはそれまでサンフランシスコのカストロ地区では見られなかったようなもので、ドッペルゲンガー的な熱を持ち込んだ。『ミルク』に出演したスターたちがレッド・カーペット上でインタビューにこたえ、彼らが演じた実際の人物たちがそのすぐそばで、こちらもインタビューにこたえていた。クイアな若者の組織のためのチャリティとして企画された映画のガラ・パーティには、ギャヴィン・ニューソム市長ほか政治家たちからリーバイストラウス社の重役まで、サンフランシスコ内でのVIPたちと、(ヴァン・サントの拠点である)ポートランドの市長、映画業界の著名人たち、そして、まだ金融市場の崩壊による損失をこうむる以前のお金持ち千人が出席した。彼らは全員、カストロ・シアターのネオンの下のひさしのもと入場した。宮殿のような内装はいつにもまして輝いており、カストロ地域ではおなじみのオルガン奏者がえんえんと演奏したと思うと、ついにステージ奥に消えていき、興奮につつまれた

群衆はうなり声をあげた。私の後ろの席にいたハンサムな若い男性も「ぼくがピザを配達したんです」と言って拍手をあげた。もちろん、映画のなかで、ということだが。

映画が始まり沈黙が訪れると、観客たちは鏡の家に入り込んだことを知ることとなった。シヨーン・ペンが、ハーヴェイ・ミルクの身体、声、そしてしぐさにとって代わられるにつれて、スクリーン上の世界をシアターの外の世界と区別することがどんどん困難になった。そして、映画が終わってクレジットになった時、私たちに出口はなかった。シアターを後にしても、さっきまで見ていたストリートに戻るだけだったのだ。ただし、ハーヴェイと彼が愛したうつくしい男の子たちはもういない。ハーヴェイは暗殺されてしまったし、彼の友人たち、恋人たち、そして支持者たちはその群れごと AIDS という災いに持っていかれてしまった。それは、ハーヴェイが生きた時代にはまだ知られていなかった病だけれども。

ヴァン・サントの映画の驚異のひとつがこれだ。一九七〇年代は AIDS 以前の世界、ゲイ・リベラーション運動と疫病の恐怖の合間の期間だったのだ。(雇用主や家族や近所のコミュニティに対して)暴露される恐怖から自由に、しかし、まだ、死に至る病にさらされる恐れはない。それは、転落前の、政治としての快樂の時代だった。この短命な理想郷は、薄められてはいるものの映画のなかにある快樂の中心になった。まだ誰も、ハーヴェイがもうすぐ死ぬことを知らない。本人は予兆を抱いているが、また、彼ら自身も、裁判にかけられる暗殺犯もいままに死への道に追従することになるとは思っていない。それは、医学的な大波によって押し流された、消滅した世界だ。遺された痕跡は、当時の新聞を満たしたおくやみ(死亡)記事の洪水であった。

歓声をあげたり泣いたりしようと身構えている観客で満員のキャスト・シアターでこの映画を見るのは身震いするようなことになるだろうと私は予想していた。だが、実際には、周囲の観客が歓声をあげて

いくなかで私自身はなにかが欠けているような気がした。ヴァン・サントの映像センスを強く敬愛する私から見ると、近年の作品と比べて、痛烈な勢いが感じられなかった。そのかわり、いったん切り離され、遠く離れたところで物事がおこっているような、登場人物たちは本人たちのコピーでしかないように感じられた。それはおそらく、直接ハーヴェイと一緒に過ごしたわけではないにしても、その時代を私自身が生きたからかもしれない。映画に落胆したというよりは自分自身にがっかりしてしまった。私はどこで間違っただろう？

私はドキュメンタリー映画『ハーヴェイ・ミルク』を、二十五年にわたって上映会や授業の教材として繰り返し見ていたので、俳優たちという詐欺師に自分の記憶を明け渡すことができなくなっていたのかもしれない。キャストロ・シアターでの私の周囲の観客たちは、ミルクの物語を初めて発見しつつあり、彼らは明らかに感銘を受けていた。ところが私は、個人の物語を歴史の構造に組み込み、人生を記念碑化した天才的なドキュメンタリー版をあまりにも情熱的に愛しすぎている。ヴァン・サント版でも、事実とフィクションのハイブリッドがかき回され、証拠によるものと想像によるものが合体して、歴史的に再現された説得力のある瞬間がたちあられるたび、私は興奮した。シヨーン・ペンが古いカセット・レコーダーを手にし、ハーヴェイの「もしも私の頭に弾丸が入り込むならば、その弾丸がすべてのクローゼットの扉を破壊しますように」という言葉を発する間は、その家のなかでピンが落ちたとしても聞こえるくらい集中した。

しかし、落胆させられることも多かった。私にとっての問題は、ブラックによる脚本だったのだろうか？ ブラックの直接の経験ではなく、人から聞いたことを、テレビ的なセンス、つまりおおぶりの筆で、エピソードを中心に描く脚本のためだったのだろうか？ 私は『ブラックが脚本を手がけたテレビ・シリーズの』『ビッグ・ラブ (Big Love)』のファンだったので、それは考えにくい。では、多くの点についてブラックがクローヴ・ジョーンズに頼ったからだろうか？ 時折、ハー

ヴェイの物語というよりもクリーヴ・ジョーンズの物語を見ている気がした。歴史の証人が、自分自身がその物語の中心だと感じることは理解はできるが、その物語が完全に別の人物を中心にすえるべきである場合には、妙なプリズムになってしまふ。

それとも、私の問題はショーン・ペンだったのだろうか？ 素晴らしくて、勢いがあり、そう、オスカー受賞にふさわしいパフォーマンスを見せてくれた……しかしそれでも、根本的な意味で、鮮烈なまでに、ショーン・ペンのままであったあのパフォーマンスのせいだろうか？ ハーヴェイ本人を知っていたとある友人はこう言った。「ショーン・ペンには本当にハーヴェイをチャネリングして霊をおろしていた。もしも、ハーヴェイが映画スターだったら、ただで」と。もしもハーヴェイ役が無名の俳優だったら、私は魅了されたのだろうか？ 多分。でも、その場合、どの会社が製作資金を提供しただろう。そして、サンフランシスコでの撮影が許可されただろう？ ハーヴェイ自身と同じくニューヨーク出身のユダヤ系の人に演じてほしいと思うような、純粹主義者に私はなってしまったのだろうか？ それまでは、そんなに文字通りを求めたことなどなかったのに。

自分自身の精神の、複雑な法医学的検分を行う間、私の内面探しは続いた。自分が書いた脚本でもなく、オリジナル素材でもないためにいつもよりも慎重なヴァン・サントの演出が問題なのだろうか？ もしくは、哀歌を必要とする歴史の負荷がヴァン・サントを制限したのだろうか？ 撮影だろうか？ ヴァン・サントが頻繁に起用するカメラマンであるハリス・セイヴィズによって撮影された『ミルク』は、私には、明らかに距離をおいてヴェールか布を通して見ているかのよう感じられた。それが哀歌にとっては適切であり、歴史への正しい距離感だということを理解はできたが、その夜の私は、これは違う、と感じた。私は近さと親密さを切望した。不完全さと即興性が欲しかった——あの時代そのものと同様の。ヴァン・サントがあの世界を知っていたことを、私は知っていた。そして、別の撮影プランがあったこ

とも私は知っていた。ヴァン・サントは、当時の地元のベテランたちと一緒に一九七〇年代のドキュメンタリーのように、一六ミリカメラで、生放送のように出来事を撮影することを考えていたのだ。だが、その案は、フォーカス社によって、スター俳優を起用した作品としては即興的すぎ、リスクが大きすぎる（もしくは、費用がかかりすぎる）と却下されたらしい¹⁸。よりラフなルックは、私を喜ばせただろう。そして、八ヶ月前に私も含めた多くの人々がロケ地で感じたように、あの時代へと観客を勢い良く投げ込んだことだろう。

私の反論はおいておくとして、この『ミルク』は伝記映画であってドキュメンタリーではない。両者の混成物であろうとしていたとはいえ。伝記劇映画は、ひとりの英雄（もしくは病んだ人物）の、伝説的な卓越と結びつけられており、映画のなかでも最も保守的なジャンルのひとつだ。脚本家として、ブラックは登場人物たちと出来事とをドラマ上の上下関係にもとづいて構成した。ヴァン・サントはスター俳優たちを、歴史上の位置付けだけではなく映画史のなかの位置付けを意識して配役した。私が最終的に到達した結論は、この映画は高貴な企画だけれども、私自身はターゲット観客層ではない、ということだった。少なくとも、まだ。

三月二八日、カストロ・シアターから観客が流れ出していくと、そこには少人数ながらブラカードをもって熱心な抗議活動を行う人々があった。「提案8号にNO！ヘイト（憎悪）にNO！」と唱える彼らは、翌週の選挙で決まる命運が何なのかを観客に知らせていた。提案8号とは、前年六月にカリフォルニア州最高裁判所によって法制化されたばかりのカリフォルニア州における同性婚を無効化する法案で、選挙にかけられることになっていたのだ。皮肉なことに、映画『ミルク』が提案6号をめぐる闘争と、いかにハーヴェイが草の根行動で戦ったか、ゲイ・コミュニティに対してカミングアウトを促したか、をたどったばかりだった。フォーカス社が上映会場で配ったバッジには、ハーヴェイの政治およびライフスタイルの教えのひとつ「多勢に混ざっ

て個性を失うな (Don't blend in.)」が記されていた。ハーヴェイは、人はすでに知り合いになっていく人のためにしか投票しないものだという確信をもっていった。だからこそ異性愛者として「通用 (パス) する」のではなく、カミングアウトが重要だったのだ。映画館のなかで、私たちは、ハーヴェイとアンとその他の同盟者たちが、極悪非道な提案をスクリーン上で阻止するのを見たばかりだった。観衆は熱心に喝采した。今度の選挙で歴史が繰り返し、カリフォルニア州が再び偏見と不正義を倒すために投票すると確信して。我々は思った。なんて驚異的なだろう。三〇年後、同性愛者の法的権利をめぐったもうひとつの闘争を鏡にうつしだす、まさにそのタイミングで映画『ミルク』がたちあらわれるとは。

観客たちはそのようなムードのまま、一九七八年にハーヴェイ・ミルク市政執行委員とジョージ・モスコニー市長が撃ち殺されたのと同じ建物である市庁舎へと移動した。その建物は、二〇〇八年六月以降、一万八千組近いゲイとレズビアンのカップルが——そのうちの多くのカップルが、ハーヴェイ・ミルクの胸像に見守られるべく、二階の丸天井の下で誓いの言葉を述べることを選択した——結婚した場所でもあった。私自身も、恋人メアリーと九月十日に詣でていた。まったくのところ、映画『ミルク』を、悲嘆の披露ではなく、祝福がともなったことは、不適切なことではなかった。ハーヴェイは誰よりもパーティーを愛していたのだから。

市庁舎の洞窟のような部屋が、その夜は、ハイ・ファッションな、カンヌ映画祭式のプレミア上映パーティーへと変貌させられていた。ショーン・ペンとロビン・ライト・ペンをはじめ、ディエゴ・ルナ、ジェイムズ・フランコ、エミール・ハーシュ、そしてジョッシュ・ブローリンも参加していた。そしてもちろん、ガス・ヴァン・サントとダスティン・ランズ・ブラックも。さらに、昼間、市庁舎に入ったことのあるすべての政治家もいた。ジェイムズ・シャムスはニューヨークから関係者を引き連れていたし、リーバイス——当日のメインのス

ポンサー——のお偉方も揃っており、彼らのブランドの、サンフランシスコの歴史と、501を愛用するゲイの顧客たちとの絆を改めて強調した。ついに、ハーヴェイ・ミルクが、喪とともにではなく、華やかなさんざめきと祝祭とともに思い出される時が来たのだ。市庁舎の屋内はバー、ビュッフェ、皮のソファ、そして「私の名前はハーヴェイ・ミルクです。私はみなさんを勧誘するためにここにいます」と特注プリントされたクッションによって変貌していた。抜け目のない政治家ハーヴェイが、笑いとともににせよ、険しい表情とともににせよ、少なくとも映画『ミルク』においてはすべてのスピーチに盛り込んでいたスローガンがクッションになったのだ。見たばかりの映画に動転して、アイ・コンタクトを避けながらバーの近くで飲んでる人たちもいれば、天空のディスコ舞踏会がまさかりであるかのように踊っている人たちもいた。出口では、Aクラスのイベントにつきもののおみやげが渡された。ミルクの名前がついたリーバイスのバッグと、幸運な人たちにはさらに、泣く時にすぐることのできるクッションとが。映画はいろんな意味で素晴らしかった。例えば、あの時代を喚起したこと、サンフランシスコ市の政治の実情の描写、ひどい出来事とその後展開のためにあまりにも長い間、不適切に記憶されてきたあの世界を召喚したこと。私が気に入ったのは映画前半のニューヨークの地下鉄でのクルーゾングのシーン、ハーヴェイがスコットをナンパする時の大胆さや、当時、ニューヨークからサンフランシスコへと国を横断することの向こう見ずで奔放な感じ、サンフランシスコのカストロ地区が男の子たちでいっぱい未開の西部だという雰囲気などだ（とはいえ、ゲイ・パッシングとしての殺人という実際にあった事件が描かれていることではっきり示されているように、玄関前のポーチで男同士がキスすることは、命を失うことにもなりうる場所でもあったが）。当時の文化の好物ヒーローのひとりであったシルヴェスターへ、短いながらもオマー・ジュが捧げられているところも私は気に入った。けれども一九七〇年代のカストロでのセックス・ライフへのこの

映画のアプローチについては、私は途方にくれた。男の子たちがいつも入り浸っていたハッテンサウナが一度たりとも言及されないのだ（スコットがサウナで一夜をすごしたというセリフが気付かれにくい形であるだけ）。（ハーヴェイの当選祝い以外には）毎夜、ディスコに駆けていくという描写もなし。さらには、ハーヴェイ自身のベッドでの実践についてもきっぱりと貞節バージョンで描かれているのだから。とはいえそれでも、ヴァン・サントが実際の当時のアーカイヴ映像を大量に盛り込んだこととブラックが脚本で再構築したことは、ある種の建築的なコラボレーションとして機能した。古典と現代があわさって、まったくもって新しい主張となった——新しい記念碑に。その夜私は感情的には失望し、物語的には納得がいかなかったが、その後すぐに気持ちが変わることとなった。その時はまだそうだとは知らなかったが。この映画は、それ自体をはるかに凌駕する存在となったのだ。こぼれた牛乳ミルク、とはよく言ったものだ。

二〇〇八年十一月四日 歴史が映画を編集する

一週間後、私は市庁舎に舞い戻った。今度は投票するために。プレミア上映の夜のように、今回も、そこには「オバマ」「8にNO」と書かれたプラカードを掲げた大勢の人たちと、連帯の意を表すためにクラクションを鳴らしながら通り過ぎる車がいた。カストロ通りでのあの冬の日のように、私は再びエンパワーメントを感じて高揚した。私は大統領選ではオバマに、州選挙では提案8号に反対の票を投じた。共和党候補にサラ・ペイリンが追加されたことは、私にもうひとつの、一九八〇年代の文化戦争……知らないもの、他者、「我々とは違う」人々への恐怖を利用することによって、保守権力がたやすく力を得たときへのフラッシュバックをもたらした。私は、共和党の最新の女の子をとおして、フィリス・シュラフライやアニタ・ブライアントが選挙戦に戻ってきたかのような気がした。

サンフランシスコは数ヶ月にわたってオバマの選挙支援に全面的に取り組んでいるように見えた——オバマが次の大統領になるために、草の根運動を復活させ、電話連絡作戦をボランティアで手伝い、国中で演説をして。ダスティン・ランス・ブラックも、映画『ミルク』の宣伝ツアーが終わったばかりにもかかわらず、LGBTコミュニティーズが投票日にちゃんと選挙に行つてオバマに入れるようにするために、国中の政治集会で献身的に演説してまわった。危険きわまりないことにモルモン教徒たちとカトリック教会がまったく同じことをしていることに気づく人はいなかった……彼らの場合は、同性婚がいかに神に反するかを教会で説き、国にお金を注ぎ込むというかたちで提案8号をターゲットとしていたわけだが。モルモンとカトリックが多勢を説得する間、LGBTコミュニティは（お粗末な）宣伝と面白くもないスローガンに頼っていたのだ。

私を知るすべての人が提案8号は不首尾に終わると予想していた。「すべての人」は間違っていた。提案8号は可決された。まさにその瞬間、オバマの勝利に浮かれ、提案8号の可決にべちゃんこになった友人たちと一緒に部屋のなかで、私は、選挙速報を見ながら、『ミルク』が違う映画になったことをさとった。

『ミルク』が劇場公開されるころには、選挙結果がこの映画を明確に再編集していた。伝記ジャンルの保守的な定型は、我々の時代に対しての論評へとフレイミングし直されていた。ミルクの、草の根活動家を集め、偏見という影を払拭するためにはゲイやレズビアンが公に姿を現さなくてはならないというすべてのシーンが、突如、ミルク本人が愛したカリフォルニア州でたった今起こった問題についての署名入りコメント記事になったのだ。ハーヴェイは、労働組合との連合やほかのコミュニティや、権利から疎外されたグループと共通の目標を持つにはどうすればいいかを知っていた。これは、まさに今、必要なスキルだ。また、ハーヴェイは、市と州の政治の熱した雰囲気なかで選挙戦を勝つには、どのような才覚やスタミナや靴の皮をすり減ら

することが必要なかも理解していた。デニムのリーバイスのポケットが裏側に、スローガンが表側についていたバッグを持って私たちが町を歩き回ると、すべてが変わった。「みなさんの地域の市制執行委員候補ハーヴェイ・ミルクです」彼らのメッセージはノスタルジックなだけではなく、ほろ苦かった。ハーヴェイから受け継いだものは幅が狭すぎた。カミングアウトして存在を受け入れられ、権利を得ることに關してはイエスだが、草の根組織活動によって選挙に勝つことについてはノーだった。

提案8号が可決されたあとには深い悲しみがひろがった。もちろん、暗殺があったわけではない。また、提案6号のように、可決されたことで仕事を失う人が出たり、学校で魔女狩りが始まるというわけでもない。ただし、子供や家や、病院でお見舞いをする権利を失う可能性は人々の悪夢のなかで存在感を示した。同性婚は複数のLGBTコミュニティにとつて、異論もありながらも、過去も現在も優先されてきた。そのような儀式や戦略を嘲笑する人たちもいる一方で、死に物狂いで権利を求める人々や、法的保護や在留資格を緊急に求める人々もいた。ジェリー・ブラウン司法長官が、同性婚反対の投票結果はマイノリティ（少数派）国民の権利を踏みつけるものであり、憲法違反であるとの訴えをおこしたときには一瞬の希望が感じられた。¹⁵ 法的混乱と絶望感が空気を満たした。

映画『ミルク』が全米各地で劇場公開されたのは、カリフォルニア州の反ゲイ法案が可決されたあとのタイミングだった。観客がつかめかけ、公開一週目の週末のチケット売り上げ額は百五十万ドル（約一億五千万円）に近い数字となった。この映画は、世代を超えてLGBTにとつての、また、結婚における平等を支持する人々にとつての新たな巡礼先となった。歴史によって編集され、『ミルク』はもはや十月にプレミア上映されたのと同じ映画ではなかった。それは、さらなる悲しみの層を身にまとい、喪失と裏切りの感覚は更新され、熱烈な新たな観客を得ていた。サンフランシスコでは、平日朝十時からの上映

すらも数週間にわたってソールドアウトだった。肝心のカストロ地区はといえば、観客が長い列をなした。人々は、共有されたショックと絶望の儀式として、『ミルク』を見に行ったのだ。そしてさらには。

『ミルク』を物差しとして、提案8号をめぐる魂からの反省は続いた。失策が指摘され、戦略が非難された。観客は、ハーヴェイが当時、提案6号に反対するために、『ゲイ&レズビアン雑誌である』『アドヴォケート』誌の後ろ盾の人々に対して、お行儀の良い表現と広告戦略を使うなどともなないと公然と反抗し、そのかわりにはっきりと突きつけるような表現を使い、個人個人を大切に草の根の選挙運動を行うべきだと主張するシーンを見た。サンフランシスコの政治の多くを知るベテランであるハーヴェイ自身が、当時、けなした、まさに同じ道筋を、今回、なぜLGBTコミュニティのリーダーたちはたどってしまったのだろうか？ 観客があと知恵を抱くにいった今、映画『ミルク』が予言だと感じられるようになったのは、ぞっとするほどであった。たしかに、「8にイエス」の選挙戦が勝利したのは、選挙民の恐怖を食いものにし、選挙民を混乱させる言葉つかいの抜け目ない広告戦略が展開されたことによるが、同時に、反対陣営の弱さにも助けられてのことだった。「8にノー」の戦術は説得力に欠けた音痴な選挙戦を展開し、その上、三つの要因によって弱体化した。まず、イエス側（と政治における教会）の力をみくびったこと。不適切な草の根組織活動（オバマを大統領にすることに集中してしまった）。さらには、8号が否決されて同性婚合法状態が継続した場合にどうなるのかについての、なまなましい悪しきステレオタイプや歪められた説明に対して対抗できていなかったことによつて。

選挙での敗北は、基地に活気を与えた……：残念ながら、投票時には間に合わなかったわけだが。そして、あらためて、もう一度、新たな法制化を求めている選挙戦が、今回は、地域と民族のコミュニティズにも届ける草の根活動と、未来へ向けての新たな希望をともなつて、速やかにスタートされた。サンダンス映画祭の期間中に、「LGBT

市民権…映画アクティヴィズムと提案8号」と題されたパネル・デイスカッションがクイア・ラウンジで開催され、登壇者たちがメディアにおける提案8号について討論し、何がおこったのかを分析した。サングラス映画祭が(部分的に)モルモン教のテリトリーであるユタ州で開催されているからという理由で映画祭そのものをボイコットすべきだという呼びかけもあった。私にいわせれば、それは馬鹿げた考えだ。映画祭のゲイのディレクター、ジョン・クーパーが明白な事実を指摘した——サングラス映画祭はその開催年数のほぼすべてにおいて、極めてクイア・フレンドリーであり、一九九〇年代前半のニュー・クイア・シネマの盛り上がりを育む触媒としての役割を果たした、と。その上、毎年、ユタ州の複数のLGBTコミュニティがサングラス映画祭に対して、主流以外の文化を提供してくれることに感謝を表明しているのだ。そう、まさにそのパネルを開催している部屋で、もとモルモン教徒のトランス女性がソルトレイクシティでのユタ・プライド・パレードに大勢の人々が参加したことを語った。地元でゲイでモルモン教徒という人が、明らかに感情がたかぶった様子で立ち上がり、ゲイとモルモン教の両方のコミュニティで汚名を着せられていると感じる、と苦情を述べた。アイダホ州の片田舎からやってきたハンサムな若いゲイ男性が、自分にはリーダーシップが必要なのだと述べると、「あなたがリーダーだ……私たちが助けに行くことは約束する」と言われた。長きにわたって語られてきたように、私たち【LGBT】は、本当にあらゆるところに存在するのだ。

デイスカッションでは私は、提案8号の成功はアフリカ系アメリカ人のコミュニティのせいだとするLGBTの反応について、いかに愕然としたかを述べた。というのも、提案8号のために、お金をつき込んで応援したのはモルモン教徒たちとキリスト教徒たちであり、アフリカ系アメリカ人のコミュニティとは重なっていないからだ。私は、とても古くからの友人であるアフリカ系アメリカ人コミュニティのリーダーからのメッセージをたずさえていた。ちなみに、その人物は、ゲ

イ・フレンドリーな異性愛者であり、そういった人はアフリカ系アメリカ人コミュニティにはとても多いのだ。彼女はこう問いかけていた。「LGBTコミュニティが人種差別的である以上にアフリカ系アメリカ人コミュニティがホモフォビックであると本当に思うの？」と。

パネリストたちは連帯(アライアンス)の本当の意味を語った。連帯が機能するためには相互的でなくてはならない、と。例えば、十五年前に移民たちを悪霊扱った提案187号の時にはLGBTコミュニティはどこにいただろうか？ 同性婚についての見解の相違は人種、民族、宗教よりも世代によるものと指摘する者もいた。ACLU(アメリカ自由人権協会)のマット・コルズはこう宣言した。「六十歳以上が凶表から外されたら、ゲイとレズビアン結婚は簡単に可決され、法制化されるだろう」年月の経過が最も強力な勝利戦術となるのかもしれない。

二〇〇九年三月二十五日

後日談およびアカデミー賞

オスカー。人々があまりにもアカデミー賞授賞式や彫像を気にしていることに、私は常に驚かされている。私がそれらの成り行きに興味がないのは昔からだ。賞を決める投票は、映画としての質や重要性和関係があったことはほとんどなく、むしろ、マーケティング・キャンペーンの影響力と興行成績、特定のエージェントやパブリシストや映画会社トップが昇格したか降格したか、さらには、その他、味わい深さにおいては劣る要因も含め、様々な要因を示すものだからだ。それに加えて、長つたらしいショーが退屈だということもある。毎年、ぐったりさせられる。しかし、私の周囲ではLGBTコミュニティが固唾を飲んで待っていた。また前回のようになるのだろうか、それとも今回は違う結果になるのだろうか？

ノミネーションがアナウンスされると、ガス・ヴァン・サントは映

画『ミルク』に向けられた敬意を知った。彼自身が最優秀監督賞にノミネートされたのをはじめ、シヨン・ペンが最優秀主演男優賞、ジョッシュ・ブローリンが最優秀助演男優賞、ダスティン・ランズ・ブラックが最優秀脚本賞、ダニー・エルフマンが最優秀作曲賞、ダニー・グリックが最優秀衣装賞、エリオット・グレナムが最優秀編集賞、そして最優秀作品賞と、『ミルク』は八部門でノミネートされたのだ。で、ヴァン・サントの解釈は？ 「これらのノミネーションは、ハーヴェイ・ミルクの遺産が生き続けることを確実にするだろう」観客や記憶や歴史のことはいいとして。いや、アカデミー会員たちの投票は、ミルクという人物と『ミルク』という映画が歴史に居場所を得るための基準となるだろう。また、ガスが間違っていたと誰が言えるだろう？ グーグルやフェイスブックやツイッターや、その次に登場した何かの時代においては、映画は私たちの文化が所有する歴史的記録に最も近いものなのかもしれない。

最終的に『ミルク』に授与されたオスカーは二体、ブラックの最優秀脚本賞とペンの最優秀主演男優賞だった。ヴァン・サントは最優秀監督賞を逃した。『スラムドッグ・ミリオネア』というジャガナート【ヴィシュヌ神の第八化身。「不可抗力」の意味もある】がそれ以外のオプシオンを不可能にした。とはいえ、重要な二つの賞が『ミルク』に与えられたことは、アメリカ国内での興行成績が三千二百萬ドル【約三十二億円】近くに達したことや、フォーカス・フィーチャー社がミニ大作として手がけた野心にみあった顕彰であった。しかし、重要なのは受賞の事実よりも、それにともなったスピーチ行動であった。

「彼らに希望を与えなくてはならない」これは、ハーヴェイ・ミルクがとあるサンフランシスコの政治家から学び、こころにとどめ、オバマの大統領選よりも一世代前にハーヴェイ自身のメッセージとしたものだ。コンテクトが重要だ。政治的個人的大変動と大混乱のなか提案8号が可決され、人々は家と貯金を失い、複数の市が経済的に破綻し、ヘイト(憎悪)犯罪が増加し、カリフォルニア州が破産寸前だっ

たのだ。そうしたきびしい時に、安直な解決法としてスケープゴートを求めるのはよくあること。ブラックは、ハーヴェイ・ミルクの生涯を、それが最も必要とされている時に呼び戻したのだ。刺激的なリーダーシップと政治的戦術の例として。

名前を呼ばれ、ステージに駆け上がったブラックは、スピーチを用意していた。そう、次の仕事を保証すべく通常の礼儀正しさは遵守された——プロデューサーや会社や監督への感謝として。だが、その次にブラックが述べたスピーチは、近年、聞いた憶えのないものだった。「十三歳の時……テキサス州サンアントニオの保守的なモルモン教徒の家からカリフォルニアに出て、ハーヴェイ・ミルクの話聞いて、希望を持つことができました……いつの日か、ありのままの自分をオープンにして生きられるだろうと、そして、誰かと恋愛することすらできるかもしれない、さらには結婚することもできるかもしれない、と」それで終わったとしても、希望と、アメリカ合衆国のどこからでもカリフォルニアという夢へと偉大なる移住をすることについての、歴史的なスピーチとなっただろう。だが、ブラックは語り続けた。そして、誰かが終了のタイマーを鳴らしたり、マイクの音声を切ることはなかった。

もしもハーヴェイが三十年前に私たちから奪われていなかったとしたら、彼は、今夜、私がこうすることを望んでいると思います。つまり、教会や政府や家族から、「できそこない」だと言われてきたゲイやレズビアン⁽²⁰⁾の若者たち全員に、君たちにはうつくしく、素晴らしい、価値のある生き物だ、そして誰が何と言おうとも、神は君たちを愛しているし、もうすぐ、君たち全員がこの偉大な我々の国全体で、連邦レベルで平等な人権を得る日が来ることを約束する、と、言うことを。神様、私たちにハーヴェイを与えてくださり、ありがとうございます。

ミルクという人物の骨髄に自分自身をすべりこませ、数十年を経て、チャネリングで墓から呼び戻し、自らの俳優としてのキャリアのなかでも強力な役柄としたシヨーン・ペンもオスカー授賞式に参列していた。ストリート（異性愛者）の俳優たちがゲイを演じることであまりにもたやすくオスカーを受賞するという自明の理は悲しいことではあるが、今作のペンにはその価値があった。

そして、我々も彼に値する存在であった。ペンは、俳優が必ず言う呪文のような謝辞の途中で、観客とカメラにまっすぐに向かってこう言った。「今夜、私たちの車が走った経路で憎悪のプラカードが掲げられているのを見た人たちにとって、同性婚禁止条例を支持する投票をした人たちにとって、今はじっくりと考え、また、予測するいい時だと思えます——自分たちのおおいな恥を、そして、そのような支持を続けていくなれば自分たちの孫たちの目にも恥が見えるだろうということ。私たちはすべての人が平等な権利を得るようにしなくてはならない」

私は疑わない。いつの日か、ブラックやペンのスピーチを聞いた子供がハリウッドやワシントンやその他の場所で壇上にあがり、彼女や彼にこれらのスピーチがどう影響を与えたのかを振り返ることを。そして、映画『ミルク』がこころの変化、人生の変化をもたらしたのだと語ることを。希望は今日、かつてないほどに肝要だ。そしてそれゆえに、この映画に対する私の初期の肯定と否定の入り混じった反応は二〇〇八年から二〇〇九年の月日と出来事によって驚嘆へと変貌した。それは、伝記映画の伝統とニュー・クイア・シネマ的な期待を超えた一種の運命感であり、映画評論および映画史家のパイオニア、ヴィトルツォが（彼と私には相違点も多いのだが）適切に提示したあのことの核心に到達したものだ。つまり、映画は私たちに、私たちのアイデンティティ感覚に、私たちが異なる未来に向けて抱く許容度に影響を与える、ということ。『セルロイド・クローゼット』の、映画が私たちを完全に形作るという伝達理論には私は一度たりとも同意したこと

はない。なぜなら、私たちは映画に反旗を翻し、抵抗することや、自分たち自身の目標に向けて利用することもあると考えるからだ。だから、その三月末の一夜だけ、私は不快感を忘れたのだ。映画の魔法を信頼することを選択したのだ。

そう、ハーヴェイ・ミルクの精神は、数々の幽霊で有名なサンフランシスコに、いまだに出没している。公共図書館の中の、ジェイムズ・C・ホームル・ゲイ・アンド・レズビアン・センターで、ハーヴェイの人生の初期についての展覧会が開催されていた。このセンター名は、寄付をしたゲイの篤志家の名前だ。サンフランシスコにはミルクの名前を冠した高校があり、図書館があり、連邦政府の建物すらある。そして、ハーヴェイ・ミルク民主クラブは地元政治において強力な存在感を持っている。サンフランシスコの新聞は三十周年についての複数の記事を掲載した。一つはもちろんミルクについて。もう一つはホワイト。もう一つはジョージ・モスコニー市長について。そしてもう一つはジョーンズタウンの犠牲者についてのものだった——熱意あふれ希望を抱いたサンフランシスコの信者たちが、ピープルズ・テンプルのリーダーであるジム・ジョーンズに従ってガイアナに向かい、クール・エイドを飲んで、死へと赴いたのだ。ちょうど、ダン・ホワイトがミルクとモスコニーを殺害したのと同じ週に。

ニュー・クイア・シネマ運動から十年以上後、映画『ミルク』は、私たちをより従来型の様式と歴史へ引き戻し、ある人物と教訓を取り戻させた。そうすることによって、それは映画としての位置付けを超えて政治的事実となった。二〇〇八年から二〇〇九年にかけての晩秋から冬、『ミルク』を見ることは政治的行動となった。『ミルク』の上映館は（アメリカじゅうで最終的には八百八十二館になったが）選挙結果を嘆き悲しむ人々に避難と救済を与える一種の保護区となった。チケット代だけがなされる場所というわけだ。歴史は必ずしもいつも書き換えられるわけではない。ハーヴェイ・ミルクは、現実でそうであるように、映画のエンディングまでには死んでいなくなっ

まう。しかし、『ミルク』は説明と考察を行った。そうすることで、新たな希望をひっかけて、古い恐怖を永眠させることのできる枠組みを建造したのだ⁽²⁾。それは、初期ニュー・クイア・シネマの生意気で小粋な作風でもなく、当時の映画製作者たちのような派手な爆発装置ではなかったかもしれない。だが、『ミルク』はそのハートを正しい場所に持っていた。ゲイ・プライドではない。もっと大きな何か。それは、たとえば狂乱。そして、悲嘆、怒り、記憶。

後から考えれば、ドキュメンタリー映像とドラマをミックスするというヴァン・サントの決断は賢かった。そのおかげで観客は歴史の事実と一緒に物語に感情移入できるからだ。私にとって最もエモーショナルなシーンは、一九五〇—六〇年代、警察によるゲイ・バー摘発の実際の映像のところだ。こざっぱりした身なりの男性たちを、単にバーの客になっているという理由で、風俗犯罪取締班が取り囲み、彼らの顔にフラッシュライトをあびせ、自分と同じ種類の人たちとお酒を飲んだという理由で、囚人護送車に押し込める。仲間を求めただけで犯罪者にされるのだ。

警察による摘発の記録映像は、【警察無線を傍受し、犯罪現場にいち早く到着しては撮影した有名な写真家】ウィージーを思わせるような無情な照明とフレーミングで私のところを動かした。それは目だった恥だ。目の前で人々の人生が破壊させられるという。実際、この映画に我々観客を誘いこんだのは、ヴァン・サントによって冒頭に配されたドキュメンタリー映像だった。「過去を見る、思い出せ、忘れるな」と記録映像は合図しているようだった。「こういうことはまだ全部終わったわけじゃない。私たちはまだ自由に家に帰れるわけじゃない」と。そして、その通りなのだ。でも、長い年月、たくさんの映画が変化をもたらした。私たちはまだ世界のなかに存在している。ニュー・クイア・シネマの一過性の流行の後でも。そして、二〇〇九年、オバマ大統領がハーヴェイ・ミルクに生前の功績をたたえる賞を贈ったハワイホアウスの自由勲章授賞式においても。我々が存在していることには

議論の余地はない⁽²⁾。

ガス・ヴァン・サントが世界に向けて発表した映画『ミルク』は、風船のようだ。空に解き放たれると、風を追ってどんどんと、ついには見えなくなるまで上っていく。彼が作ったのは映画以上のなにか、先に進むための道案内であり、過去の汚物のなから掘り出した宝箱であり、未来を予言するしるしだった。「私の名前はハーヴェイ・ミルク。みなさんを勧誘するためにここにいます」全くだ。この熱心な勧めは簡単に見過ぎたり忘れたりしてはいけない。あのころ、ゲイであることはライフスタイルの問題ではなかった。それは存在と認知を求めた血なまぐさい闘いだった。そして映画『ミルク』が私たちのもとにあり、思い出させてくれる——私たちはまだ約束の地には入っていないかもしれないが、それが何であるにせよ、引き返すことはできないのだ、と。

本稿短縮版初出は『The Guardian』紙二〇〇九年一月十六日付、「消えた世界の幽霊たち (Ghosts of a Vanished World)」P.あ。

訳注

- (1) 劇映画『ミルク』の公式解説では“Harvey”は「ハーヴェイ」と表記されていたが、本稿においては、「ハーヴェイ」と表記を統一した。
- (2) 本文中、原文での() および、言い換えについては() でくくり、訳者による補足は【】でくくった。
- (3) ニュー・クイア・シネマ(NQC)とは、リッチ本人による命名である。リッチは、一九九一年秋のトロント映画祭から、一九九〇年代半ばまで、NQC現象の時期とする。統一的な定義はないが、ゲイやレズビアンとしての強い当事者性を有しながらも、人権獲得運動の伴走者としての映画ではなく、援用、パステイ・シヌ、アイロニーを用い、また、歴史構築主義を意識した、ポストモダンな作品群であるとす。デレク・ジャーマンはその意味でNQCの先駆者であり、ガス・ヴァン・サントの『マイ・プライベート・アイダホ』(一九九一)も、アイドリックな人気が俳優が主演しているものの、その実験的手法において、NQCに含められている。リッチは、一九九九年の『ボーイズ・ドント・クライ』(キン

バリー・ピアス監督)がNQCの終焉を告げた作品と述べるが、その理由のひとつとして、F T Mトランス男性を演じ、数々の賞に輝いたヒラリー・スワンクが、実生活では異性愛女性であるというアピールを激しく行ったことにより、当事者性が失われたことであるとす。リッチはまた、NQCがレズビアンやゲイの観客の存在を示したことによって登場した、彼ら彼女らをターゲットとして、一般的異性愛ロマンチック・コメディの同性愛版を描いてみせる一連の商業映画に批判的であった。彼女がヴァン・サントによる大規模な劇場映画『ミルク』を論じるにあたっては、この歴史観が背景にある。詳しくは、以下を見よ。B. Ruby Rich: "The New Queer Cinema: Director's Cut." *New Queer Cinema: The Director's Cut* (Durham: Duke University Press, 2013) pp. 16-32. (初出は一九九二) なお、「クィア(queer)」とは、もともと男性同性愛者を指す苛烈な蔑称であったが、一九九〇年前後から、あえて誇りをもって、ゲイ男性だけではなくLGBTによって採用された自称である。英語圏と日本語圏における「クィア」については、以下を参照のこと。溝口彰子「補遺一 理論編——『BL進化論』の理論的文脈」『BL進化論』ポイズラプが社会を動かす』(太田出版、二〇一五)二六七—二七八ページ。

原注

- (1) このフリーズは、エプスタインとシュミュークンのドキュメンタリー映画の四年後、一九八八年に出版された故ランディ・シルツの著作『カストロ・ストリート』の市長』によって定着した。
 - (2) 興味深いことに、製作費は一九七六年の二百年記念に向け、それに向けた映画を作るためにアーティスト個人個人に初めてお金向けられた特別会計の結果であった。その後も個人の映画やビデオ作品への助成は続いたが、一九九〇年代になると、製作費の高騰により、NYSCAからの貢献の決定力は低下した。
 - (3) すでに他の二人のゲイの政治家がいた。マサチューセッツ州議会議員のエレイン・ノールとミネソタ州上院議員のアラン・スピアだ。ただし、この二名はミルクよりも知名度が低く、また、ミルクほどには、ゲイの選挙民を代表していたとはとらえられていなかった。
 - (4) ハーヴェイ・ミルクが提案13号が可決されたのと同じ年に亡くなったことは興味深い。6号や8号と違い、13号はカリフォルニアのLGBT市民に汚名をきせるものではなかった。そのかわり、地所の税金を購入時のレベルで凍結すること、将来の予算法案改正に必要な得票率を三分の二に引き上げること、事実上改正を不可能とし、共和党の少数派が州政治に不相応な権力を行使し続けるようにすることによって、州の
- (5) インフラ、教育制度、そして受け継いできたものの未来を、かつて例がないほどに破壊した。
 - (6) 本作撮影監督のフランシス・リードと編集担当デボラ・ホフマンは、その後、映画人としての活躍が著しい。リードは、かつてレズビアン映画やビデオを配給していたアイリス・フィルムズの共同創始者でありディレクターであり、『子供たちのためにできる限りのこと』(In the Best Interests of the Children) (一九七七)の共同監督もつとめた。ホフマンは『アルツハイマーを扱った映画として最高傑作のうちのひとつである』(従順な娘の苦情 (Complaints of a Dutiful Daughter)) (一九九四)を作った。ちなみに二人は、『共同で』南アフリカの真実和解委員会の知恵と挑戦についての雄弁な賛辞である『長い夜から昼間への旅 (Long Night's Journey into Day)』(二〇〇〇)を作った。リチャード・シュミュークンは二本目のドキュメンタリー『私たちの考えを変えろ』(ドクター・エヴリン・フッカーの物語 (Changing Our Minds: The Story of Dr. Evelyn Hooker)) (一九九二)を作った。彼は一九九三年『AIDSで亡くなった』。
 - (7) 『ハーヴェイ・ミルク』は二〇一一年にクライテリオンからDVDとブルーレイのボックスセットとして再発売された。セットには、ハーヴェイの甥でゲイであるスチュアート・ミルクの証言、未収録シーン、ニュース映像、さらにはこの筆者による作品論も含まれている。
 - (8) これらをもふくめて、ヴァン・サントの発言はすべて、筆者による二〇〇八年十月二六日の電話インタビューより。
 - (9) エリック・デイヴィス、『ブライアン・シンガーとガス・ヴァン・サントがこぼれたミルクをめぐる「あらそう」』『Cinematical.com』二〇〇七年四月一三日。
 - (10) 【原文で示されたURLには動画が存在しないため、本和訳版では削除。二〇一七年三月三日確認】なお、ジェン・ギローメンによる個人的ドキュメンタリー作品『混ざった使い方 (Mixed Use)』(二〇〇八)は、『再現された』カメラ店とカストロ地域のフッタージと、ミルクを知っていた人々への新たなインタビューを組み合わせることで、ミルクの物語をアップデートしており、参考になる。
 - (11) 私はかつて、ハーヴェイの悪名高き性生活を控えめに報じたとして『ニューヨーク・タイムズ』紙を批判したが、それを大幅に上回る映画『ミルク』の貞節ぶりときたら、『ハッテン浴場 (Baths)』といった単語すら発せられないのだ。しかし、政治運動の中心がセックスであることは、かかわっているすべての人が知っているとおぼた。
 - (12) 一九九〇年代はじめにサンフランシスコパブリックライブラリーのイベントで会った時、スコットは「ミルクの未亡人」だと自己紹介していた。彼は一九九五年二月四日にAIDSによる肺炎で死去。

- (12) ロブ・エプスタインは、ドキュメンタリー映画『ハーヴェイ・ミルク』のフッターのすべてと、その他の素材をヴァン・サントとブラックに提供した。それらすべてが、脚本の細部の根拠となった（「翻案脚本」とは？）ヴァン・サントは、劇映画『ミルク』の行進や集会のシーンに参加予定のエキストラ全員にたいして、必須の歴史講義として、『ハーヴェイ・ミルク』をカストロ劇場で上映した。
- (13) 短期間ながら携わった一六ミリ撮影者から二〇〇九年冬、個人的に得た情報である。フォーカス社の確認はとっていない。
- (14) ハーヴェイ・ミルクの背景にあった真面目な目的については、次を見よ。Foss, Karen. "The Logic of Folly in the Political Campaigns of Harvey Milk (ハーヴェイ・ミルクの選挙戦における愚かみの論理学)." *Queer Words, Queer Images*, ed. Jeffrey Ringer. New York: New York University Press, 1994.
- (15) カリフォルニアの法律のもとでその提案を違法とすることは不可能であるとカリフォルニア州最高裁が三度目となる判断を下したため、本上訴は敗北することとなる。しかし、五月と十一月の間の空白期間に結婚した私のパートナーと私自身は、約一万八千組のカップルとともに、結婚が法的に認められたままではいられないという特異な階級に現在、所属している。本稿執筆中も地域および連邦の裁判所で訴訟が進行中だ。卓越した政治弁護士であるセオドア・オルセンとデイヴィッド・ボアズがこの挑戦を手がけているため、多くの人々が上訴が最高裁まで到達するの期待を寄せている。
- (16) 二〇〇九年一月の「映画アクトイヴィズムと提案8号」パネルにも参加した方々の洞察あふれるご意見にこの場で感謝したい。ジョン・クーパー、ロブ・エプスタイン、ラシヤド・ロビンソン、デイナ・フランク。そしてとくに、マット・コールズ。
- (17) 「我々の州を救え (Save Our State)」とも呼ばれるカリフォルニアの提案187号は、共和党のビート・ウィルソンが州知事であった一九九四年に有権者たちによって可決された。この提案は、すべての違法移民を、カリフォルニア州の社会福祉、医療、教育から排除するところのだった。連邦控訴裁判所によってこれはのちに違憲であるとされた。民主党のグレイ・デイヴィスの就任以降は訴訟はとり下げられた。
- (18) フレズノでのしっかり組織された運動の流れから、二〇〇九年の春には、「カリフォルニア州の」真ん中で出会え」と題された集会が実現した。これは、結婚する権利の再獲得のための新たな草の根運動を展開しようとするものであった。また、カリフォルニア州の敗北の後、ユタ州とニュー・ハンプシャー州では同性婚が法制化された。
- (19) 『ブロックバック・マウンテン』が最優秀作品賞に選ばれなかった事実から立ち直っていない人々は多く、『ミルク』も同様の運命をたどるのではと懸念を表明していた。
- (20) 後日のニューヨーク市での『ミルク』プレミア上映に際してのブラックの発言は OurSceneTV のサイトで公開されたが、それによると、以下が追加されていた。「そう、私の世代は役割を果たさなかった。立ち上がらなかつた。自分たち自身を代表することがなかった。私たちはストレート（異性愛者）のアライ（同盟者）を利用した……ハーヴェイのメッセージは、自分自身のために立ち上がれ、というものだった。道を横切って、自分に反対の投票をするかもしれない人のところに行つて、私を知つてくれ、ということだった。そうしてステレオタイプ【悪しき類型】をいくつかでも打ち破ることができた。投票日には自分に投票してくれるかもしれない。この映画からは学べる教訓があると思います……ゲイ・コミュニティに……ゲイ・コミュニティに行つて、この映画を手にして言つてほしい。彼らはどうやって成し遂げたんだ」と一動画からの書き起こし。【原文で示されたURLには動画が存在しないため、本和訳版では削除。二〇一七年三月三十一日確認】
- (21) 最近のクイア映画やテレビ文化の文脈でのこの映画については、以下に詳しい。Benshoff, Harry M. "Milk and Gay Political History (映画『ミルク』とゲイの政治史)." *Jump Cut: A Review of Contemporary Media* 51 (Spring 2009). (<http://www.ejumpcut.org/archive/jc512009/Milk/>) シンゴフは、『ミルク』は『エントリより彼方』(二〇〇一)、『めぐるりあう時間たち』(二〇〇一)、『ブロックバック・マウンテン』(二〇〇五)と並んで、「映画会社発のネオ・クイアな格式高いブティック映画 (boutique studio neo-queer prestige picture)」のカテゴリに属すと論じている。
- (22) 二〇〇九年八月十二日、オバマ大統領は、十六人の「変化の仕掛け人」のうちの一入として、ハーヴェイ・ミルクに「大統領自由勲章」を授与した（十六人のなかには、サンドラ・デイ・オコナー、デズモンド・トゥットウ、ビリー・ジーン・キングもいた）。授与式には、ロブ・エプスタインがハーヴェイの甥であるスチュアート・ミルクと一緒に出席した。
- "Got Milk? Gus Van Sant's Encounter with History." in *New Queer Cinema*. B. Ruby Rich, pp. 236-260. Copyright, 2013, Duke University Press. All rights reserved. Republished by permission of the copy-right holder. www.dukeupress.edu